

『2021年度 春学期・第1・2クォーター学生による授業評価報告書』刊行にあたって

学長 高橋秀裕

2021年度春学期末に実施した学生による授業評価アンケートの集計結果がまとまりましたので、ここに報告書として刊行いたします。このたびの調査にご協力いただいた学生の皆さん、授業担当の先生方、アンケートに関する検討会の先生方、担当の事務局職員の各位に深く感謝申し上げます。

本学の授業評価アンケートは組織的なFD活動の一環として他大学に先駆けて実施されてきた事業です。まさにPDCAサイクルのチェック部分にあたり、授業ごとの具体的な効果や問題点を把握し、教員による教育改善に役立てていただくことを目的としています。是非この報告書を積極的に利用していただきたいと存じます。一方で、コロナ禍を通じて、大学教育に対する先生方の視野も大きく変化したものであると思います。情報技術の基盤がさらに発展し、今後通信技術の利用の仕方が大きな課題となります。授業評価アンケートのより効果的な利用もその方法を含めて検討する必要があると感じています。

さて、2018年11月の中央教育審議会の答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」において、大学等の高等教育機関が今後養成すべき人材像が示されました。その中で、高等教育改革の実現すべき方向性の第一として、学生が「何を学び、身に付けることができるのか」を明確にし、学修成果を学生が実感できる教育を行っていることを掲げ、「学修者本位の教育の実現」を謳っています。これを受けて、2020年1月、文部科学省は「教学マネジメント指針」を公表しました。指針のコンセプトは「供給者目線」から「学修者目線」への転換ということです。予測困難な時代、卒業後も学生が学び続けるために必要な資質・能力を身に付けさせるという観点で、大学の教育が最適化されているか、学修者目線で捉え直す必要があるというわけです。

具体的には、まず卒業認定・学位授与の方針(DP)を、卒業生に最低限備わっている能力の保証として明確に設定し、それに沿って授業科目を精選、統合し、履修する順序や履修要件を見直して、履修する科目を絞り込むことも必要です。学生が学修成果を具体的に把握・可視化できるような仕組みを導入する必要もあるでしょう。さらに社会からの信頼と支援を得るため、大学としての成果を自発的・積極的に公表することも求められています。保護者世代の大学教育の一般的な姿とは異なり、今や、一人ひとりの学生が「何を学び、何を身に付けたのか」が問われています。そうした教育の質を保証するための仕組みが、教学マネジメント指針ということになります。

本学はここにDX(デジタルトランスフォーメーション)を大学総体として積極的に導入しようとしています。科学技術の発展は生態系として捉える必要がありますが、自然の生態系よりも科学技術の生態系の変化は急速です。デジタル技術も同様です。一部にデジタル化を推進し効率化を図っても、全体が繋がっていないと、他のところがかえって忙しくなったり過度な負担がかかったりします。全体が繋がることで新しい価値が見えてくるわけです。単純に「DX=デジタル化」ではないということです。教育部門ではこれから教員・職員と十分議論を重ね、LMSやCRMといったシステムの導入を推進し、まさに学生が自らの学びを可視化でき、達成感が得られるような支援システムの仕組みを確立したいと考えています。もちろん学修成果の可視化は、学生の能力の測定や評価ではなく、学生自身が自分の強みあるいは弱みを自覚し、学生生活の中での気づきや課題を言語化することにより、主体的な学びの姿勢を醸成することにある、ということでしょう。これらのシステムを通して、学生や教職員が一緒になってそれぞれ新しい価値創造ができる、そんな可能性も開かれてきています

ウィズコロナ、ポストコロナ時代における大学教育に対する社会の目は一層厳しいものとなってきます。授業のさらなる改善のため、関係各位の益々のご理解とご協力をお願いします。